

当節「あきらめ節」を考える

はぎわら 萩原
ふみたか 文隆

●電機連合 電機総研室長

添田唾蟬坊をご存知ですか。この人物は、明治・大正期に活躍した「演歌師」です。彼が歌っていた「演歌」とは現在のいわゆる演歌とは異なり、「演説歌」といわれ、政治を風刺する歌であり、また市井の人々の口に出せない思いを表したものだそうです。この人物の名前は聞いたことがなくても、おそらく多くの方が彼の歌、あるいはその「替え歌」を聴いたことがあると思います。興味のある方はちょっと調べてみてください。子どものころに聞いたことのある楽曲の歌詞やメロディーがすぐに出てきます。また、諸先輩方にとっては、その青春時代、フォークソングが華やかしき頃、高田渡氏がそれらの作品をリバイバルしていたということで懐かしいものかもしれません。

さて、その代表作の一つに「あきらめ節」というものがあります。歌詞には「資本家」や「地主金持」などのその時代を反映する言葉が繰り返し出てきています。また、つらくとも「義務」は果たすもの、一方で「権利」などは求めてはならない。さらに「貧乏は不運 病気は不幸 時世時節とあきらめる」ともあります。これらの内容を当世に当てはめれば、まさに「自己責任」という言葉がにわかに頭に浮かんでいきます。しかし、この歌の最後には逆説的に諧謔を弄して「わたしゃ自由の動物だから あきらめきれぬと あきらめる」と締めています。

敗戦後、時代が変わり「国民主権、平和主義、基本的人権の尊重」の世の中になりました。ですが、なぜかこの歌詞が気になってしまいます。社会には、言葉の一つひとつに気を配り、自分の意思を明確に伝えることができるし、そうすべきことが責任や役割である人たちがいるはずですが。しかし自由な表現が認められることになったにも関わらず、なぜか「本心を隠す」ことに殊更、努力をしているような気がする人たちがいるのはなぜでしょうか。最近、「言葉遊び」や、よく考えると「矛盾する言葉の組み合わせ」による「新語」、そのような語句を使った説明に、なんとなく納得してしまっているような気がします。さらに、それらが活字として新聞、雑誌に掲載されるとこれらの文字がなんとなく「権威」を持ち、また、いわゆる心地の良い「美辞麗句」が増えているように感じているのは私だけでしょうか。

最後に、先日の新聞に作家の故城山三郎氏の次のような言葉が紹介されていました。「見るからに卑のにじむ人がいます。そういう人に限って、美学とか矜持とかいう言葉を好んで口にしたがるようです」。この言葉を聞いてなるほどと思いました。まずは自己の「普段言っていること」、「普段行っている行動」を内省しなければと最近しみじみと感じております。